

イザヤ書第65章1－9節

ガラテヤの信徒への手紙第3章23－29節

ルカによる福音書第8章26－39節

教会歴は聖霊降臨後の期節、いわゆる緑の期節に入りました。今年はC年ですから連続してルカ福音書から学びます。ただし、本日の旧約日課は、以前はゼカリヤ書でしたが、新しい聖書日課でイザヤ書となりました。イザヤ書は、新しい聖書協会共同訳となって新共同訳からかなり変わりましたが、ここでは特にその比較をせずに、今用いている新しい訳から学びます。

イザヤ書は、バビロン捕囚を挟んで長い期間の預言活動を記しています。この65章はその活動の終わりの部分、バビロン捕囚後の事柄、ことにその時のイスラエルの様々な混乱について語る預言です。イスラエルの民は、バビロン捕囚終了後も様々な混乱の中にありました。自己の王国の滅亡と集団的移住という社会的・政治的混乱だけではなく、占領者であるバビロニアの文化に順応してしまったという文化的・宗教的混乱もあったのです。小見出しでは、「救いの約束」とありますが、この部分は、救いを語る前に、異文化に順応してしまったイスラエルの状態を批判します。もちろん、ただ批判しているのではなく、それでも立ち返るようにと主なる神様は呼びかけています。そのことを見出すことが大切です。

「私を求めなかった者に私は尋ね出され、私を探さなかった者に見いだされた。私の名を呼ばなかった国民に『私はここにいる、私はここにいる』と言った」。1節から、主なる神様とその民イスラエルの関係がかなり悪化していたことがわかります。本来は、イスラエルの方から熱心に探し求める方である主なる神様、その方ご自身が、「私はここにいる、私はここにいる」と語り掛ける状態であったからです。「私はここにいる、私はここにいる」は、注意を呼びかける同じ言葉の繰り返しなのですが、直訳すれば、「わたしここ、わたしここ」と主なる神様が自らの存在を示している状態です。それは滑稽な姿にも思えてしまいましたが、それだけイスラエルを大切にしようという神様の愛が現れているとも言えます。

「私は、反逆の民に、思いのままに良くない道を行く者に、日夜、手を差し伸べた」と2節でも、文字通り主なる神様がイスラエルに手を差し伸べて救おうとされていたことが記されていますが、続く3節から5節では、イスラエルの状態が記されています。その表現を見る限り、心も体も主なる神様から離れていたようです。

6節、7節は、「報復する」という言葉が繰り返されます。それは厳しい裁きの言葉のようにも聞こえますが、8節以降の救いを導き出すためにあります。「報復する」（新共同訳「報いる」、口語訳「報い返す」）はこの文

脈では訳と意味がとりにくい言葉ですが、起こった出来事に対してそれ相応の対価か何かを用いて解決することです。つまり、主なる神様は、単にイスラエルを何事もなかったかのように、ただただ許して、カナンの地へ導くのではなく、何が間違いであったのかを明確にするということです。「**彼らの過ちも、彼らの先祖の過ちも共に――主は言われる。**」（イザ 65：7）という表現は、まさに歴史に関わる神様であることが示されています。バビロン捕囚の出来事、それ自体はイスラエルにとって大きな出来事ではありますが、それはその時起こったことだけが問題なのではなく、そこに至るまでの経緯についても問うということであるからです。

本日の旧約日課は、「**主はこう言われる。『ぶどうの房に発酵しかけの果汁があるのを見たらそれは潰すな、そこには祝福があるのだから』と人は言う。そのように、私は私の僕たちのためにそのすべては滅ぼさない。ヤコブから子孫をユダから私の山々を継ぐ者を生み出そう。私が選んだ者たちがそれを継ぎ私の僕たちがそこに住むだろう**」と救いの希望の言葉で終わります。その部分だけでは、すべてのイスラエルの救いではなく、主が選んだ者たちの救いのように解釈できますが、最終的な希望は、少し後にある 17 節以降「**見よ、私は新しい天と新しい地を創造する。先にあったことが思い出されることはなく心に上ることもない**」という表現とはじめとして語られます。「**新しい天と新しい地を創造する**」。「創造」という言葉は主なる神様だけに用いられる言葉で、「新しい」とは、内容的な新しさ、新しい秩序を意味します。それはイスラエルを超えて、人間にとって本当の喜びであることを意味します。「神と人、人と人、人と自然」の関係が回復し、「まことの平和」が完成するからです（イザヤ 65：17～25）。またその救いにおいて、イスラエルは「御言葉におののく人」であることを求められます（イザヤ 66：1-5）。

バビロン捕囚（586BC～538BC）は、イスラエルと周辺世界との間で起こった世界史的出来事です。その意味では他の地域や時代の人々には直接無関係のない出来事といえます。しかし、この世界を、その時間も空間をも主なる神様が造られた、その神様を信じる時、この出来事はわたしたちにも関わります。ここでのイスラエルの間違い、そして約束された救いは、わたしたちにも関わるといえることです。そこから学ぶべきことはたくさんあると思いますが、最も大切なことは、主なる神様の約束された「まことの平和」は、まだ実現していないということです。つまり今も課題であり、また希望であるのです。言い換えれば、理想過ぎる「幻」といえるかもしれません。そして、教会に集められるわたしたちは、その「幻」に向けて、ただただ何もしない歩み続けているわけではありません。イエス様の十字架と復活は、その「幻」が、イエス様を通して実現することの証であるからです。この証を信じて、偉大な理想の「幻」に関わり続けたいと思います。